

北杜夫の書齋遺品 — 『どくとるマンボウ航海記』写真24枚の検討 —

高 橋 徹（信州大学総合健康安全センター）

1. はじめに

作家・北杜夫の遺品寄贈（親族・斎藤家から松本市立博物館・旧制高等学校記念館）の経緯については、先に報告した¹¹⁾。本論では、その寄贈資料内にみつかった『どくとるマンボウ航海記』当時の写真24枚を紹介し、本資料を調べるなかで判明した事柄を時系列で記述した。また本写真の一部を掲載する形で、中央公論新社から発刊された『どくとるマンボウ航海記 増補新版』（2023年）⁸⁾についても紹介した。

2. 写真 24 枚

遺品内にみつかった写真は計24枚、縦6センチ、横5センチ程度のサイズで、北杜夫が写っているものが12枚（図1～図12）、辻邦生夫妻が1枚（図13）、その他の日本人が写っているものが3枚（図14～図16）、マグロ調査の様子や風景が8枚（図17～図24）であった。



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



图 9



图 10



图 11



图 12



图 13



图 14



图 15



图 16

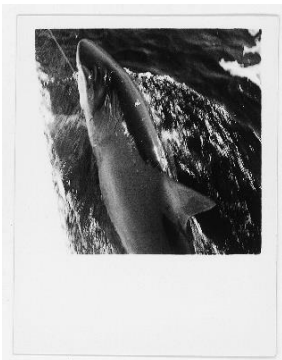


图 17

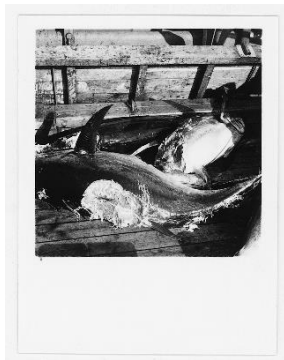


图 18



图 19



图 20



图 21



图 22



图 23



图 24

筆者（高橋）が既刊書籍でみた記憶のある写真は図1のみであり、それは『どくとるマンボウ航海記』初版本の表紙カバー袖に掲載された著者紹介の写真であった（図25）。この2枚の写真を見比べると、初版本掲載写真では、左側（船の機械部分）がより広く写りこんでいた。よって、本写真（図1）とは別に、元となる写真が存在するのではないかと考えられた。

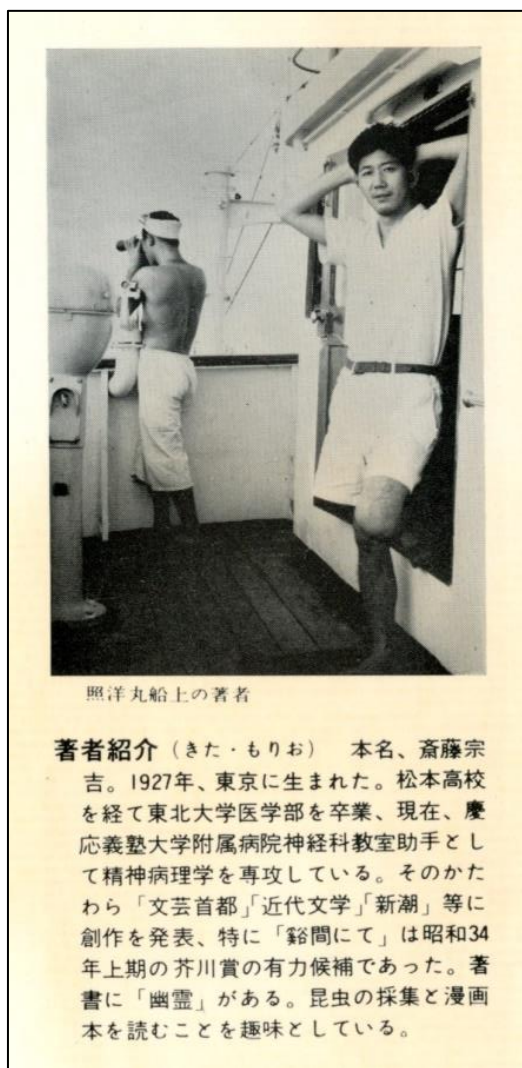


図25



図1（再掲）

写真に関する情報（未公開写真なのか等）を確認するため、2022年5月に齋藤喜美子夫人に問い合わせたが、新たな情報は得られなかった。一方で、喜美子夫人から、『どくとるマンボウ航海記』初出単行本（1960年）⁴⁾を出版した中央公論新社（旧中央公論社）の編集者・三浦由香子氏を紹介していただいた。三浦氏に中央公論新社の資料保管室を調べてもらったが、これら24枚に該当する写真をみつけることはできなかった。

未公開資料とは断定できないものの、貴重な資料には違いないと考えられた。このため、筆者から三浦氏に、本写真を掲載した『どくどくマンボウ航海記』復刻版の出版を提案したところ、翌2023年が「中公文庫創刊50周年」にあたるため、創刊年（1973年）に文庫化された『どくどくマンボウ航海記』の再版を検討中とのことであった。2022年10月、同社内の企画会議で、翌年2月の『どくどくマンボウ航海記 増補新版』の刊行が正式に決定された。

写真掲載にあたっては、その所蔵元として「松本市立博物館分館 旧制高等学校記念館 所蔵」のクレジット表記がなされるため、旧制高等学校記念館でも企画展ができないものかと考え、同館学芸員・高山峻一氏に相談。また写真公開にあたっては、辻邦生夫妻（図13）を除く2人の日本人（図14～図16）を特定しておくことが必要と考えた。

まず北杜夫と同じ背景で撮られた写真（図16）に着目した。背景にある看板の文字「VISTA SUL LAGO E SULLE ALPIE PARTE DELLA SVIZZERA」は、イタリア語で「スイスの湖とアルプスの眺望」と訳され、イタリアで撮影された写真である可能性が高いと考えられた。



図12（再掲）



図16（再掲）

『どくどくマンボウ航海記』には、「イタリアに着いてどこを見物するかは少なからず迷った。（中略）結局、ミラノの生理学研究所に去年の暮からいる医局の先輩Hに会うことにした。その研究所には後輩のKも二年ほど前から勤めている。」「Hはまだ研究課目が決まっておらず閑だったので、結局私はここでもずっと彼に案内してもらうことになってしまった。」「一日コモ湖へ行った。（中略）折悪しく小雨で、アルプスの山々も雨にけむって少しも見えない。（中略）ケーブルカーに乗って山の上に登った。このあたりには立看板があり、『風光絶佳』『歌にうたえぬほど美

しい』などを書いてあるそうだが、雨はなお降りしきり何ひとつ見えぬ。」との記述があり、写真の人物は、この医局（慶應義塾大学神経科）の先輩Hもしくは後輩Kではないかと考えた。また『どくとるマンボウ航海記』の創作余話には、「文中、パリにいたTとあるのは辻邦生、同じくAはつい先だって亡くなった早稲田大学教授の相場均博士、Mは松島医博、Nは成田医博、Hは慶應大学神経科助教の原博士、Kは加藤医博のことで、いずれも医局の先輩または後輩である。」⁶⁾とあり^{注1}、原博士と加藤医博、特に原博士の可能性が高いと考えられた。

ちょうど同年10月5日に信州大学附属図書館において、斎藤国夫氏（北杜夫研究家で、2021年に刊行された北杜夫著『憂行日記』⁷⁾の編者）の講演会が開催されたため（巻末資料1.）、講演会后、この件を斎藤氏に尋ねたところ、同時代、フランスに留学していた加賀乙彦氏（精神科医・作家）³⁾が知っているのでは、との助言を受けた。このため、加賀氏が館長を務める軽井沢高原文庫に問い合わせしてみたが、加賀氏は療養中であるとのことであった^{注2}。

次に、同年10月14日～15日に信州大学で開催された第25回日本精神医学史学会（大会長・鷺塚伸介教授）において、同学会の理事長・濱田秀伯氏（慶應義塾大学卒・精神科医）に写真をみていただいた。濱田氏からは、慶應義塾大学神経科同門の原俊夫氏と加藤隆一氏の可能性が高いこと、原俊夫氏は元北里大学教授で死去されているとのことであった。「原俊夫」で文献検索をすると、1959年発刊の精神医学雑誌にイタリア留学記が掲載されており¹⁾、また北里大学教授として写真掲載された文献（1971年）もみつかった¹³⁾。



図15（再掲）



図26 文献13掲載写真

写真の日本人のうち一人は、医局の先輩・原俊夫氏であることが、ほぼ特定された。もう一人の日本人として、医局の後輩・加藤隆一氏をネット検索したところ、顧問として勤務するクリニックの経歴欄に「慶應義塾大学名誉教授」「昭和32年～37年イタリアミラノ大学留学中、数多くの薬を用いラットにおける酵素誘導と酵素阻害を発見し、薬物代謝相互作用の基礎を確立し、神経科医より薬物代謝研究者に転向」とあった。これまでの経緯を手紙で伝えたところ、加藤氏から直接電話を頂戴した。加藤氏からは、『どくとるマンボウ航海記』においてセロトニン（脳内神経伝達物質）を研究している「医局の後輩K」とは加藤氏自身であり^{注3}、また写真の日本人は原俊夫氏で間違いのないとのことであった。ただし、原氏と一緒に写っているもう一人の日本人（図14）は、加藤氏ではなく、哲学専攻で当時留学していた元上智大学学長の大谷啓治氏（1930-2018年）（図27）²⁾とのことであった。



図14（再掲）



図27 文献2掲載写真

一方、2022年11月、中央公論新社の三浦氏から、本写真に関して新たな事実が判明したとの連絡があった。それによると、『どくとるマンボウ航海記』を収載した旅行エッセイ集『世界の旅』（1961年刊）¹⁰⁾がみつき、同書には本写真の一部（図4・図18）を含む多数の写真が掲載されていたこと（巻末資料2.）、またこの写真掲載版の『どくとるマンボウ航海記』については、当時の担当編集者・宮脇俊三氏が、『文章と写真と』⁹⁾と題したエッセイで、その出版経緯を詳述していたとのことであった^{注4}。

翌2023年2月21日、中央公論新社から『どくとるマンボウ航海記 増補新版』⁸⁾が刊行された（巻末資料3.）。同書には、本写真のうち9枚が巻頭口絵として掲載され、また巻末に宮脇俊三のエッセイ「文章と写真と」⁹⁾と北杜夫のエッセイ「傲慢と韜晦」⁵⁾が収載された。さらに同年3月

には、松本市立博物館・旧制高等学校記念館において、本写真24枚が公開展示された（巻末資料4.）。

4. 結語

北杜夫寄贈遺品内に発見された写真24枚を紹介し、写真内に写った二人の日本人が判明するまでの経緯、さらに本写真の一部が掲載された『どくとるマンボウ航海記 増補新版』の発刊経緯などについて報告した。2023年5月には、旧制高等学校記念館内3階に北杜夫の書齋が再現された（巻末資料5.）。今後も寄贈遺品の一般公開が進み、それにともなって寄贈内容の詳細が解明されていくと考える。寄贈資料内には、「世紀の北杜夫の書並びに絵画展」（1989年）開催時の写真（辻邦生や遠藤周作、なだいなだ、宮脇俊三などが写る）や、小説『輝ける碧き空の下で』の創作ノットなどが含まれており、それら未公開資料の解析と紹介を今後も進めていく予定である。これら資料を収蔵する松本市博物館分館・旧制高等学校記念館が、北杜夫を語り継ぐための拠点となることを期待している¹²⁾。

謝辞

本論作成にあたり、ご高閲とご承認を賜りました青田吉正先生、高山峻一様、三浦由香子様、斎藤由香様、斎藤喜美子様に深く感謝申し上げます。またご指導、ご協力いただきました竹内正先生、栗原正哉様、東城幸治先生、新部公亮様、上條温様、鎌倉希様、木下守様に深謝申し上げます。本論に関連して開示すべき利益相反はない。本研究はJSPS科研費 JP23K00295の助成を受けたものである。

注

注1：ちなみにドイツ・ハンブルク滞在で登場するY氏（「Y氏からはカユいところを孫の手十本でひっかくほどの世話をうけた」等）は、三菱商事ハンブルク支店長の横山薫二氏であり、北は帰国後、横山氏の長女喜美子氏と再会して結婚した。

注2：加賀乙彦（1925-2023年）は、北杜夫と同じく精神科医で作家。2022年10月の時点で療養中とのことであったが、翌2023年1月に老衰のため逝去。東京大学卒で北と同門ではないが親交は深く、北逝去時には追悼文を寄せている³⁾。以下は加賀による北への追悼文の一部。「1957年ごろパリに留学していた私の部屋に、『どくとるマンボウ航海記』の元になった航海をしていた北さんは、旧制松本高校以来の親友辻邦生さんと二人で現れた。フランスの精神科医の生活の場を見学したいのだという。私が留学していたサンタンヌ精神医学センターに案内した。とくに食堂や宿直医の部屋が見たいというので、見せてあげた。ずっとあとで、ドイツの精神病院を舞台とする芥川賞作品『夜と霧の隅で』を読んでみたら、そのとき私が案内した病院の情景がことこまかに描かれているので、私も少しは受賞作に貢

献しているのだと嬉しく思った。」³⁾

注3：『どくとるマンボウ航海記』内の後輩K（加藤隆一氏）に関する記述が以下。「Kは私を一室に連れこむと、いま研究しているセロトニンという或る脳内物質の話をはじめた。どうもなかなか勉強家だなと思って聞いていたが、あとでHに聞くと、彼は人間とみれば誰でもかまわず擱まえて何回でもセロトニンの話を始めるので研究所じゅう恐慌をきたしているそうである。」^{4,8)}

注4：宮脇俊三は本エッセイにおいて、以下のように「写真不要論」を語っている。

『世界の旅』全10巻というシリーズを企画した。既刊の外国旅行記を地域別に集めるというシリーズである。写真も各ページごとに挿入することにした。旅行記に写真は欠かせないのが編集の常道であった。第一回配本には目玉商品として『どくとるマンボウ航海記』を収めた。こんどは写真が何十枚も本文に割って入った。ところが、刷り上がった見本に眼を通してうちに、私は愕然とした。写真不要、いな邪魔！ せっかくの文章の魅力を減殺さえしているのである。「世界の旅」シリーズに写真を挿入しようとの編集方針がまちがっていたとは思わない。しかし、他の収録作品の著者にたいしては失礼にあたるが、第一級の紀行文には写真など無用にして無縁なのだ。」⁹⁾

宮脇はこのように論じているが、初版刊行から60年以上を経た現在、当時の写真は資料的価値が高く、またそれらを掲載した増補新版は、本作品の新たな楽しみ方を提供したのではないかと筆者は考える。

参考文献

- 1) 原俊夫：イタリアの精神病院. 精神医学, 1 : 587-589, 1959.
- 2) 上智大学HP “ 訃報 大谷啓治元学長逝去 ” (2018. 10. 09)
<https://www.sophia.ac.jp/jpn/article/news/info/news20181009/> (参照2023. 8. 12)
- 3) 加賀乙彦：わが友 北杜夫さんを悼む. ベスト・エッセイ2012. p167-169, 光村図書, 東京, 2012.
- 4) 北杜夫：どくとるマンボウ航海記. 中央公論社, 東京, 1960.
- 5) 北杜夫：傲慢と韜晦. 『われらの文学 16』講談社, 東京, 1966.
- 6) 北杜夫：見知らぬ国へ. 新潮社, 東京, 2012.
- 7) 北杜夫著、斎藤国夫編：憂行日記. 新潮社, 東京, 2021.
- 8) 北杜夫：どくとるマンボウ航海記 増補新版. 中央公論新社, 東京, 2023.
- 9) 宮脇俊三：文章と写真と. 『旅は自由席』新潮社, 東京, 1991.
- 10) 大宅壮一、桑原武夫、阿川弘之編：世界の旅 第1 (日本出発). 中央公論社, 東京, 1961.
(北杜夫著『どくとるマンボウ航海記』収載)
- 11) 高橋徹：北杜夫の書斎遺品 —旧制高等学校記念館への寄贈経緯—. 信州大学附属図書館研

北杜夫の書齋遺品— 『どくとるマンボウ航海記』 写真24枚の検討 —

- 究, 12 : 37-58, 2023.
- 12) 高橋徹：北杜夫の書齋遺品の紹介と活用について. 旧制高等学校記念館「記念館だより」第86号（令和4年3月31日発行）p4-7, 2022.
- 13) 臺弘、原俊夫、藤田貞雄ほか：特集 向精神薬をめぐる問題点 —座談会—くすりの使いかた—見立てと匙加減. 精神医学, 13 : 440-459, 1971.

巻末資料 1.

企画展
北杜夫『憂行日記』をたどる
 — 作品に息づく信州の自然 —

『憂行日記』編者
 齋藤国夫氏 講演会

信州大学の前身校の一つである旧制松本高等学校の卒業生で作家の北杜夫さんは、昆虫好きとしても知られています。中央図書館では、北さん松高在学中の日記を翻刻した『憂行日記』と、ご自身で作成した昆虫標本を結び付けた企画展「北杜夫『憂行日記』をたどる—作品に息づく信州の自然—」を開催中です。関連企画として、『憂行日記』の編者 齋藤国夫氏による講演会と、図書館長による展示解説を実施します。

開催日：2022年10月5日(水)

<講演会>
 時間：17:00~18:00 (受付16:40~)
 講師：齋藤国夫氏（『憂行日記』編者）
 場所：中央図書館2Fセミナー室（定員60名）
 *オンライン（ZOOM）でも配信します。

<展示解説>
 時間：16:00~16:40
 講師：東城幸治（附属図書館長・理学部教授）
 場所：中央図書館1F展示コーナー（定員20名）

参加申込：右のフォームよりお申込みください
 申込期限：10月4日（火）16:00
 *いずれも定員になり次第締め切ります

お問合せ:信州大学中央図書館 TEL : 0263-37-2172 E-mail : matsulib@shinshu-u.ac.jp

『憂行日記』編者・齋藤国夫氏講演会
 2022年10月5日開催告知
 信州大学附属図書館中央図書館

『憂行日記』編者・齋藤国夫氏講演会
 信濃毎日新聞 2022年10月7日
 (許可NO. 2305001)

旧制松本高時代の日記を編者が解説

旧制松高時代の北さんについて語る齋藤さん

「北杜夫さん虫と文学に情熱」

松本市の信州大付属中央図書館は5日、旧制松本高校出身の作家北杜夫さん（1927~2011年）が在学中の日記をつづった『憂行日記』（新潮社）を解説する講演会を開催した。

講演会は、日記や作品に登場する昆虫標本を紹介する同館の企画展（25日まで）に合わせて企画した。

「2年生になった46年から、詩や戯曲への創作熱が高まった」と齋藤さん。同年12月には「虫と文学との融和。これが自分にとっての最大の希望」とも記しており、齋藤さんは「『どくとるマンボウ昆虫記』などの作品につながる北さんの心情の動きが伝わるのが日記の魅力」と語った。

日記は入学直前の1945年6月から47年12月まで6冊のノートに残る。終戦を迎えた45年の大みそかの記述は、東京の実家が空襲で焼けたことなどを振り返りつつ、「二に昆虫、二に読書。かならずやシジミチヨウと蟻との関係を明らかにしてみせる」と記し、学生生活に意欲を燃やす様子が読み取れる。

を聞いた。編者の齋藤国夫（本名・青田吉正）さん（75）は東京IIの話を、オンラインを含め約40人が聞いた。日記は入学直前の1945年6月から47年12月まで6冊のノートに残る。終戦を迎えた45年の大みそかの記述は、東京の実家が空襲で焼けたことなどを振り返りつつ、「二に昆虫、二に読書。かならずやシジミチヨウと蟻との関係を明らかにしてみせる」と記し、学生生活に意欲を燃やす様子が読み取れる。

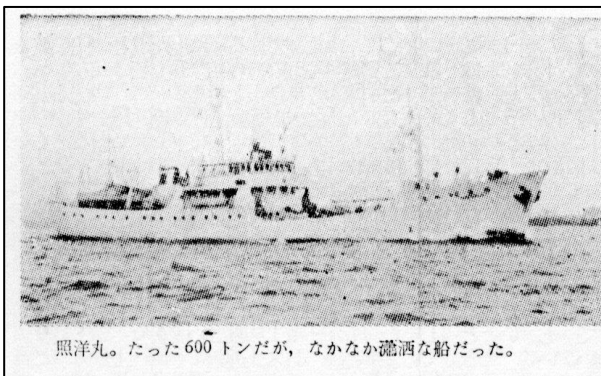
巻末資料 2.

『世界の旅1 日本出発』（1961年）外箱

同書籍収載『どくとるマンボウ航海記』掲載写真21枚



北杜夫（本名、斎藤宗吉）氏の船員手帳。上はその表紙裏と第1頁。下は第8.9頁



照洋丸。たった600トンだが、なかなか瀟洒な船だった。



シンガポールの港にはジャンクがたむろしていた。



静かなマラッカ海峡を船はすべるように進んでゆく。



スエズの裏通りでは、パジャマ姿に素足の子供たちをしきりに見かけた。

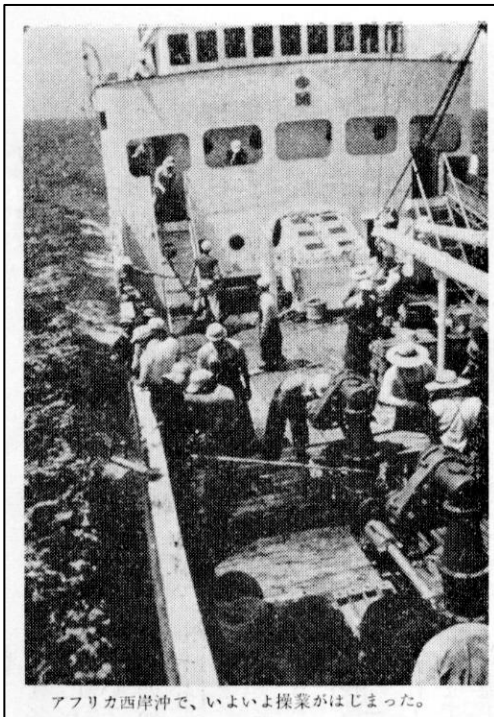
北杜夫の書齋遺品— 『どくとるマンボウ航海記』 写真24枚の検討 —



スエズ運河をゆく照洋丸



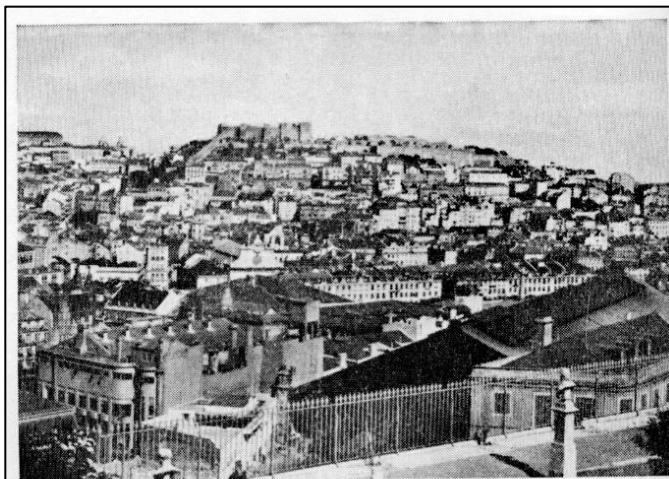
ポートマンはスエズ運河通過中、甲板で商売をするが、いっこうに売れない。



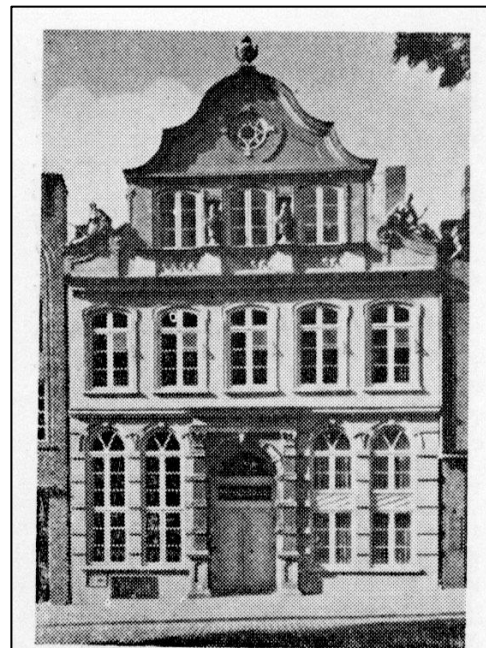
アフリカ西岸沖で、いよいよ操業がはじまった。



サメに喰いちぎられて無惨な姿になったマグロ



急坂の多いリスゴンの街

ようやく探しあてた『ブッデンブ
ロオク』の家(リュベック)



自転車の大集団。北欧の人たちは自動車よりも自転車を乗りまわす。日光が乏しいので健康のためだという。



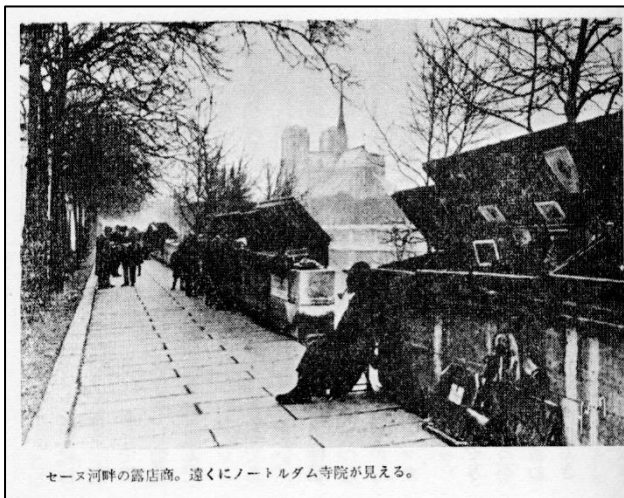
ヨーロッパではいたるところに自動販売機があるが、これはアムステルダムで見かけたソーセージの自動販売機。種類が実に多い。



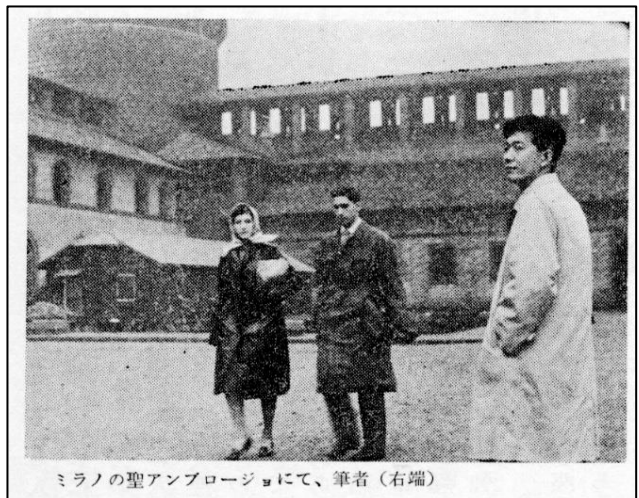
アントワープ港に入港した照洋丸



モンマルトルの街頭似顔画家

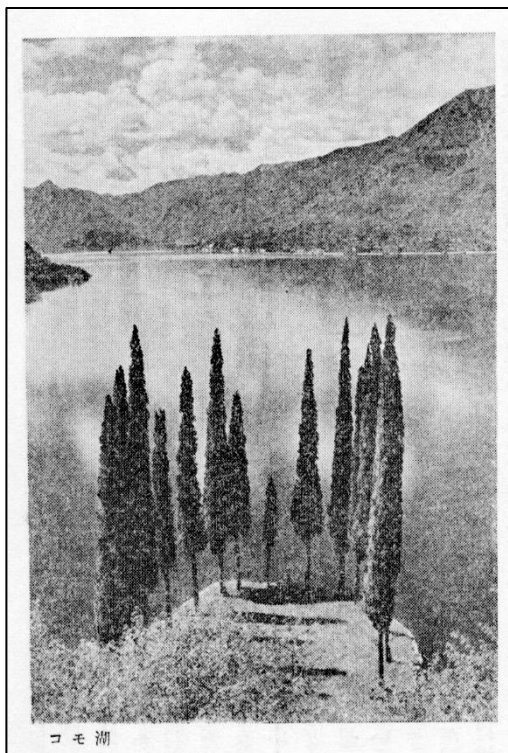


セーヌ河畔の露店商。遠くにノートルダム寺院が見える。



ミラノの聖アンブロジーにて、筆者（右端）

北杜夫の書齋遺品— 『どくとるマンボウ航海記』 写真24枚の検討 —



巻末資料 3.

水曜日 **市民タイムス** 昭和46年(1971年)10月1日創刊 (第3種郵便物認可)

旧松高出身 北杜夫さん代表作 **マンボウ航海記** 増補新版発売へ

旧制松本高等学校出身の作家・北杜夫さん(1927~2011)の代表作『マンボウ航海記』の増補新版が21日、中央公論新社から発売される。松本市の旧制高等学校記念館に昨年度寄贈された北さんの遺品の追加分に含まれていた、航海時の写真などを新たに収録。松本にもゆかりのある1冊になっている。(鎌倉 希)

自らそううつ病を公学総合健康安全センター表していた北さんを研究し、准教授で精神科医の松本にもゆかりのある1冊になっている。(鎌倉 希)

品寄贈の仲介役を担い、今回の写真も「ほとんど見覚えがない」と目を留めた。縦6枚、横5枚程度の小さなサイズで計24枚あり、北さんが昭和34(1959)年に船医として同行した漁業調査船や寄港先で撮影。当時パリに滞在し「丁夫妻」として作中に登場する、旧制松高

時代の友人・辻邦生さん(1925~99)夫妻の姿もある。高橋さんは、航海記初版を発行した中央公論新社に資料の照会をしつつ写真を掲載した再版を提案。折しも同社の「中公文庫」が今年創刊50周年を迎えた記念に、創刊年に文庫化された航海記の増補新版を計画していたことから実現した。写真9点と、著者と初版編集者・宮脇俊三さん(1926~2003)のエッセイが旧版に加わっている。

高橋さんは、既刊本はイラストの効果もあってコミカルなイメージが定着しているといい、「同じ内容でも写真が入ると違った読後感がある」と語る。写真には記念館所蔵とのクレジット表記も入り、「松本に関わりのある本。地元の人々の手に取ってほしい」と話している。

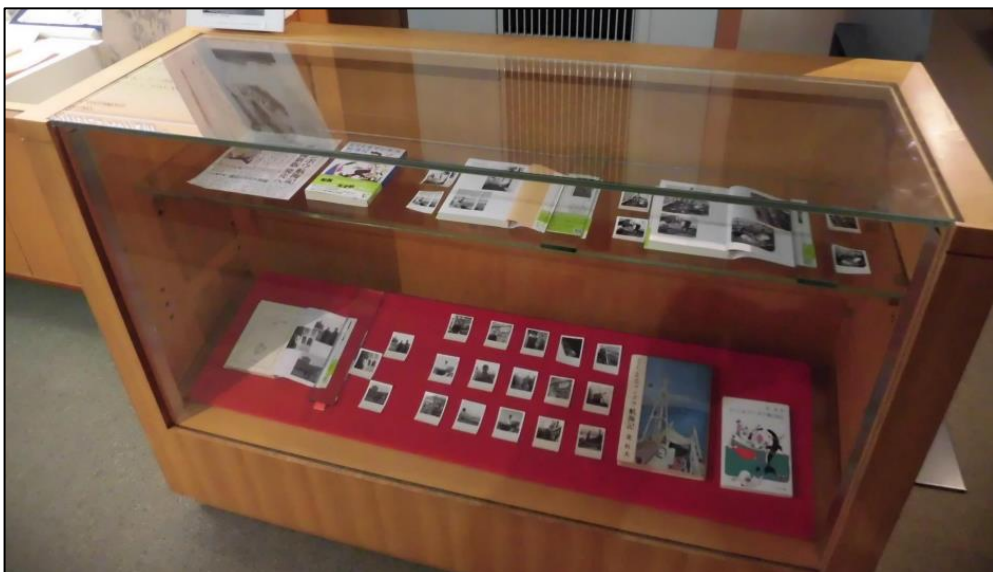
品寄贈の仲介役を担い、今回の写真も「ほとんど見覚えがない」と目を留めた。縦6枚、横5枚程度の小さなサイズで計24枚あり、北さんが昭和34(1959)年に船医として同行した漁業調査船や寄港先で撮影。当時パリに滞在し「丁夫妻」として作中に登場する、旧制松高

航海記の初版単行本を手にする高橋さんと、遺品の写真や増補新版(右端は旧版)

記念館所蔵 遺品の写真も掲載

市民タイムス 2023年2月15日

巻末資料 4.



巻末資料5.

(23) 令和5年(2023年)5月11日 木曜日

故北杜夫さんの 書齋よみがえる

松本 旧制高校記念館で再現

松本市県3の旧制高等学校記念館に、旧制松本高等学校出身の作家・北杜夫さん(1927~2011)の書齋の再現がお目見えした。壁面の改修を伴うためまだ完成していないものの、愛用していた

松本市県3の旧制高等学校記念館に、旧制松本高等学校出身の作家・北杜夫さん(1927~2011)の書齋の再現がお目見えした。壁面の改修を伴うためまだ完成していないものの、愛用していた

た重厚感ある机や本棚が並べられ、来館者や書籍が詰まった本棚も写真を中心に近づけていくという。

幅3尺、奥行き1・8尺の範囲で北さんの部屋に似た木製床を設け、家具も生前の状態に配置した。今後、机の横に窓を再現し、辞角に「寄贈品紹介コーナー」を新設。書齋再現のほか展示ケースを置き、定期的に入れ替えながら北さんのものに限らず紹介していく。

同館は「貴重な遺品を収蔵庫に眠らせておくのはもったいない。北さん目当てのファンも多いので、なるべく早く完成させたい」としている。常設展は入館料310円(中学生以下無料)。(鎌倉 希)

北さんの書齋を模して並べられた机や本棚

